# 北海道における採種園の役割とその改良への取り組み

森林総合研究所林木育種センター北海道育種場　中田了五

## 採種園とは

人工造林によって豊かな森林づくりを行う場合、植栽する苗木が「よい」ものである必要があります。

「よい」苗木を作るためには、「よい」種子を用いることが不可欠です。林業に用いる樹木では、遺伝的に「よい」種子を確保するために、採種園を利用します。

採種園とは、遺伝的に優れた木を集めてきて一箇所に植栽・管理する場所です。北海道では主要造林樹種である、カラマツ類（カラマツとグイマツ雑種F1）、トドマツ、アカエゾマツ、スギについて採種園が設定されています。北海道育種場では、国有林や北海道庁、道総研林試、道苗組などと連携して、採種園に導入する遺伝的に優れた木を作っていく仕事である育種を行っています。

## 北海道の採種園

北海道内には採種園が合計283haあり、そのうち4割以上が国有林に設定されています。平成25年度には、北海道で造林用として採取された主要4樹種の種子のうち、約6割が国有林採種園産でした。特にトドマツについては100%の約800kgが国有林の採種園で採取されています。過去5年間の平均でみてもトドマツの約8割の720kg/年を国有林採種園が生産しています。すなわち、北海道のトドマツ造林は国有林採種園に支えられています。

国有林採種園からの優れた種子の生産を維持・拡大するために、北海道育種場と国有林は様々な取り組みを行っていますが、その一つが採種園の改良です。樹木は樹冠の日当たりのよい部分によく着果する習性をもっています。そこで、採種園を間伐して光環境を改善し、種子生産を促進する取り組みをおこなっています。写真は上川中部森林管理署管内の雨紛採種園（カラマツ類）ですが、間伐後は光環境が改善され、着果も増加しました。

北海道育種場では国有林と連携して今後も北海道内の採種園の改良を進めます。さらに、より遺伝的に優れた新規採種園の設定に寄与する林木の育種を進めていきます。

写真　雨紛採種園（カラマツ雑種）の間伐前（左）と間伐後（右）
強度な列状間伐により著しい光環境の改善がみられ、着果量も増加しました。

～メモ～